

11月、そろそろコクガンたちがはるかにシベリアから渡ってくる季節です。コクガンは国の天然記念物と絶滅危惧種(宮城県・環境省・絶滅危惧Ⅱ類)に指定されている希少種です。でも実はコクガンの渡りのルートや越冬地での暮らしぶりなど、その詳しい生態はよくわかっていません。そこでこの冬(2020年1月)、志津川湾をフィールドに、コクガンに発信機を取り付け、湾内での行動や渡りのルートを明らかにする調査を行うことになりました。謎に包まれていたコクガンの生態が、南三陸町での研究から解明されるかもしれません。そこで、今回と来月号の2回に渡り、南三陸の自然と希少な水鳥「コクガン」について紹介します。

アマモの葉を食べるコクガン



湾内のコクガン渡来数の変化



今でこそ比較的身近に見られるようになったコクガンですが、以前は非常に数の少ない鳥で、宮城県内では仙台市の蒲生海岸などで少数が冬を越す程度でした。

1980年代に入って気仙沼市の御伊勢浜で群れが見られるようになりましたが、志津川湾でまとまった群れが見られるようになったのは2000年代に入ってからのことです。

データが残る2007～2008シーズンの冬以降、震災前までは戸倉波伝谷沖を中心に100～150羽が湾内で記録され、伊里前湾や平磯周辺でも群れが見られました。いずれもアマモ場のある遠浅の海岸、養殖施設の周辺で、流れ藻となったアマモをついばんでいることがほとんどでした。

震災後、一時的にアマモ場や養殖施設が壊滅したことで、コクガンは漁港のスロープなどに上陸してアオサ類を積極的に食べるようになります。2013～2014シーズンに初めて200羽台を記録し、その後再び150羽前後となりますが、2016～2017シーズンから再び200羽を超え、昨シーズンはこれまでで最大となる358羽をカウントしました。これはコクガン自体の数が増加傾向にあることや、湾内のアマモ場が復活したことによってコクガンにとって餌の選択肢が増えたことが関係していると思われますが、いずれにせよ志津川湾がそれだけの数のコクガンを許容できる豊かな海であることの証しと考えて良いでしょう。

志津川湾の自然環境

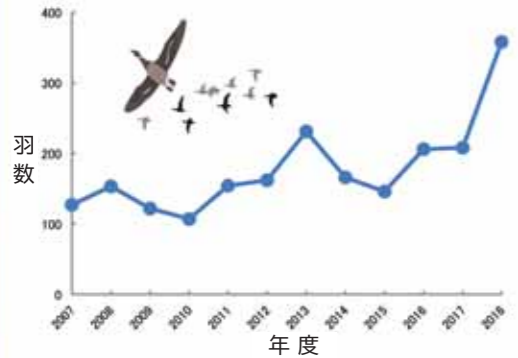
2018年10月、歌津・志津川・戸倉の海域を含む南三陸町の海が世界的に貴重な自然環境であると認められ、ラムサール条約湿地「志津川湾」として登録されました。志津川湾には、暖流と寒流がバランスよく混ざり合う独特の物理環境を背景に、マコンブやアラメなどの海藻の森や、アマモ類の草原が織りなす藻場が広がります。コクガンは、主にアマモ類の葉やアオサ類などの海藻を食べ暮らしています。つまり、志津川湾の藻場は、コクガンたちが安心して冬を越す上で、なくてはならない大切な存在なのです。コクガンは、志津川湾の豊かさを象徴する水鳥と言えるでしょう。

アマモの草原



ラムサール条約湿地「志津川湾」

志津川湾で確認されたコクガン渡来数の推移



コクガンがまとまって見られる主な漁港や海岸

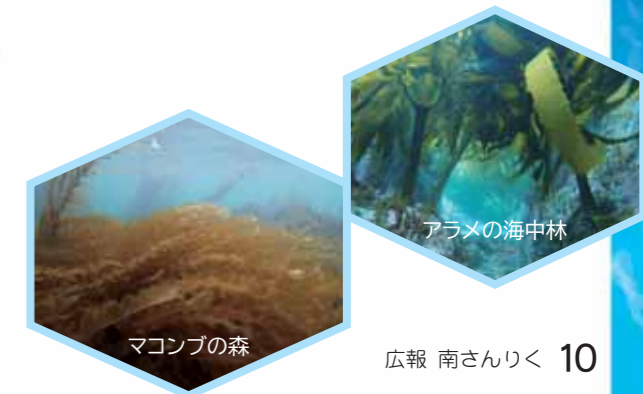


漁港のスロープでアオサ類を食べるコクガンの群れ(2011年4月3日、坂本漁港)

南三陸自然史講座のお知らせ

11月21日(木)午後7時より、生涯学習センター大研修室にて、伊豆沼・内沼環境保全財団の嶋田哲郎氏よりコクガン研究の最前線のお話をいただきます。これまでの発信機調査によって分かってきたこと、志津川湾での調査によってさらなる解明が期待されることなど、詳しく伺います。参加費・事前申し込みは不要です。ぜひご参加ください!

コクガンイラスト: 浜口とり



マコンブの森

アラメの海中林